

加藤鷹の SEX 教育学

- ◇子供のために、コーチとSEXをする母親
- ◇ゆとり教育の落とし穴
- ◇セックスレス夫婦が与える子供への影響



「性のカリスマ」加藤鷹が
マジメに語る教育論!!

数々の性に触れ培われた
「コミュニケーション力」と
鋭い視点で、現代日本における
「教育問題」に喝を入れる。

プロローグ

数年前から「草食系男子」や「肉食系女子」といった言葉が流行りだし、男の女の関係が逆転しつつある現代の日本。パソコンや携帯の普及によって、大量の情報が流れるなか、若者を中心に、物質至上主義的な考えが幅を利かせるようになってしまった。

そのひずみは、至るところで噴出している。殺人やDV、いじめや虐待……。また、セックスレス夫婦の増加など、問題は様々だ。

俺が現場で出会う女優さんなどと話をしても、昔と比べて、ずいぶんと女の子の意識や親子関係、友達関係が変化していると感じる。

いくらお金がたくさんあっても、人間には満たされないものがある。それは家族の愛であつたり、愛し合う心であつたり。

ところが、生身のまま、心を裸にして相手とぶつかり合い、譲り合い、分かち合っていくという行為そのものが、今の若者にとって、面倒くさいことになっているのだ。

メールでなければコミュニケーションが取れない、画面上の顔も知らない男性になら本音を言えるのに、親には面と向かって言いたいことが言えない、など。

そして、俺は今この日本という国で起きているすべての問題の根源は、「人間力の低下」だということに気付いた。

日本の未来を背負う子供たちのため、若者たちの性教育や女性、老人に対しても、俺が「性」を通して学んだコミュニケーション論、つまり「人間力」をあげるために、この場を借りて話をさせてもらった。

教育には答えがない。失敗も成功もない。だからこそ、難しい問題だ。

教育について語ることで、1人でも多くの人が共感し、日本がよい方向へ向かってくれることを切に願っている。

平成29年5月吉日

加藤
鷹

目次

プロローグ

Part 1 間違いだらけの親たち

■戦争を知らない親たち

■叱らないしつけという教育

■子供の前で演技をする親たち

■すべて「子供のために」と思っている親たち

■自分の非に気付かない親たち

■子供を子供扱いする親たち

■「友達親子」の行く末

■子供に干渉しすぎる親たち

■子供のために、コーチとSEXする母親

■子供のために仕事を休む親たち

Part 2 学校教育の行く末

■学校教育の崩壊

■ゆとり教育の落とし穴

■24時間365日ついてまわる、現代のいじめ

■金八先生が求められる理由

■運動会のかけっこで、順位をつけない学校

Part 3 日本の教育に喝を！

■日本の教育社会の現状

■1人でご飯が食べられない「トイレ飯」

■セックスのことは語りたがらない大人たち

■警察官だった親父の愛情ある叱り方

■父親から学んだ、男としての生き方

■ガマンができない子供たち

■靴を揃えられない、若者たち

■セックスレス夫婦が与える子供への影響

Part 1 間違いだらけの親たち

■戦争を知らない親たち

俺の両親は戦争を経験してきた世代だ。そんな親に育てられた俺は、幼い頃「白い米を食べるなんて幸せだ」と何度も言われて育ってきた。

だからこそ、白い米＝贅沢なものだと思っていたわけだが、今の若者はどうだろう。

美味しいものが溢れている今の日本には、白い米が贅沢だと思っている若者などいないと思う。そこからして、もう価値観の差が出ている気がするね。

もちろん、今の親たちも戦争を知らない世代だ。そんな親たちも「白い米を食べられるだけ幸せだ」とは思っていないし、子供にも言えないだろう。

3食きちんと食べられて、ふかふかの布団で寝る。それが当たり前だと思っている時代。だからこそ、戦争の体験を受け継ぐということは大事なことなのだ。と、俺は思う。

戦争を体験していなくても、昔はこういうことがあったのだと、話してあげるだけでも伝わることはたくさんある。もちろん、戦争の話だけじゃなくてもいい。

この世界では、今でも内乱やテロ、貧困で食べるものが十分でない国がたくさんある。鉄砲の弾におびえながら生活している子供たちだっただくさんいる。そして、たくさんの人々が今この瞬間も傷つき命を落しているのだ。

そういう現実を話してあげるだけで、子供が思う「幸せ」の価値観は変わってくる。

今、自分のいる世界がすべてではない、もっと世界は広くていろんな出来事が起こっているんだと、視野を広げてあげる手助けを、親がもつとしてあげてほしいと思う。

定義：戦争について話すことが、幸せの価値観を変えてくれる

■叱らないしつけという教育

「叱らないしつけ」というものを崇拜している母親たちが多いらしい。

子供がスーパ―の中で走り回っても、「うちの子供は本当に元気だから困るわ」などと言うだけ。けして「走っちゃダメ!」とは言わない。

子供が本などを破ったりしても、「あら、こんなに上手に破けたね」などといい、「それは破っちゃダメでしょ!」とは言わない。

そういう母親は「アレもダメ、コレもダメと言っていると、創造性が身に付かないから、子供のやることを尊重しているのだ」と答える。

たしかに、それは一理あるのかもしれない。

しかし、スーパ―を走り回ることで、人に迷惑がかかっているということを教えていないばかりか、本は破るものではなく、読むものだとして教えていない。

人に迷惑をかけない配慮や、モノを大切にする心よりも、子供の創造性のほうを優先する親がいることに、俺は驚きを隠せない。

そもそも「怒る」と「叱る」の意味はまったく違う。

「怒る」というのは、自分の感情が関係している。子供が同じことをしても、自分の機嫌が良ければ、許せるし、自分の機嫌が悪ければ、怒鳴る。

子供は、どっちが正しいのか分からず、混乱するだろう。

「叱る」というのは、相手ありきのことだ。

これはこういう理由があるから良くないということを論じて、しつけること。

だからといって、カッとなって、思わず子供を叩いてしまっても、落ち込む必要はないと思うよ。

だって、母親も人間なのだから、感情があるのは当たり前だ。子育てする中で、母親として喜怒哀楽を抱えながら子供と向き合うのが、本当の意味での子育てなんじゃないかな。

情報化社会の中で、「良い母親になるにはどうしたらいいか」や「賢い子供を育てるためには」などの本も山のように出版されている。

そんな本を読みあさり、マニュアルばかりに頼っている親も多いみたいたが、その通りに実践できなかったら、ものすごく落ち込む。「やっぱり私は、良い母親にはなれない」そんなことを考えているから、いつまでたっても自分の教育に自信がもてないんだと思うよ。

良い母親になりたければ、子供に対して自然体でいることが一番だ。今の親子関係って、子供が「これはどうしてこのなの？」という問いに、親は「的確な答えを導いてあげなくてはいけない」と真剣に思っている。

子供が親に「どうして〇〇しちゃダメなの？」と尋ねると、「それは〇〇だから、〇〇してはいけないんだよ」といちいち細かい対応をしている。

俺は、「理由なんてない！ ダメなものはダメ！」とハッキリ言ってしまったでもいいと思うんだよね。

感情をぶつけられるのは、家族だからこそできる特権。

親子関係って、もっともって感情的であっていいと思う。的確な回答を探そうとしたり、議論しようと思うと、真髓がらずれてしまう。

改めて、「ダメなものはダメ！」と言える、昔のガンコ親父のような存在って、大事だったんだなあと気付かされる。

まずは「完璧で理論的でない親にならなければ」という呪縛をぬぐい去ること。もって親子でありのままの感情をぶつけ合う関係を大切にしてほしい。

定義：親子関係は議論ではなく、もって感情的であるべき

■子供の前で演技をする親たち

子供の前で夫婦ケンカをするのは良くないと誰もが思っているだろう。

たしかに、子供が夫婦ケンカをしているところを見たいか、見たくないかと聞かれたら、誰だって見たくない。でも親が子供の前でケンカをすることはある程度は仕方のないこと。

感情をぶつけあうのは、家族だからであり、ひとつ屋根の下に暮らしていれば、ケンカをしないほうが逆に不自然な気がするね。

最近、子供の前で、わざと仲良くするところを見せる親がいると聞く。子供がいらないところでは目も合わせない2人が、子供の前でわざとハグしたり、キスしたりして、仲の良さをアピールするらしい。

そして、ケンカになりそうなきは、メールでやりとりしようというルール。子供の前では、絶対にケンカになるようなことはやめようという徹底ぶり。

割り切る演技力もすごいけど、それって、すごく不自然なことだね。

俺がガキの頃のことを思い出してみると、親同士がケンカしていることは見たことはあるが、仲良くしているところを見たことがない。

でも、仲良くしているところを見たことがないからといって、「両親は仲が悪い」とも思わなかった。

子供のことを考え、仲がいい演技をするなんて馬鹿げている。自然体でいられるべき場所は、やはり「家族」だからこそだと思うよ。

定義：子供のために夫婦ケンカをしないのは不自然

■すべて「子供のために」と思っている親たち

最近のお母さんたちに話を聞いてみると、子供のことが生活の〇割を占めているという人も少なくない。洋服やお菓子、髪を結ぶゴムまでも、子供のために全てを手作りしている、なんていう人も多いようだ。

それはとても危険なことだと、俺は思う。

子供のためには思っていることが、結局は自己満足になっていることに気付いていないんじゃないかな。

ここ数年、「洗脳」という言葉が世間を賑わしているが、結局、子育ても恋愛も「洗脳」と同じだと思う。

特に、長男・長女は、親の洗脳にモロ影響を受けているので、子供の性格と親の性格が直結していることが多い気がするね。

そして、どの親も口を揃えて言っているのが「下の子は心配なさそうだけど、上の子はなぜか心配」ということ。もちろん、性格的な違いはあるにしても、やはり「洗脳度」の高い第一子は、自分の思うとおりになってほしいという思いが強く表れているようだ。

そうやって、「子供のために」と思っているやってきた親が、もう少し年齢を重ね、自分の思うように子供が育たなかった現実には直面したときの衝撃は大きい。

なので、子供が小さなうちから、「子供のために」と思って、頑張りすぎるのはやめたほうがいい。

手作りのお菓子なんかより、市販のお菓子のほうが子供だってよっぽどうまいと思っっているはずだからね。

定義：「子供のために」と思っていることほど、子供のためになっていない

■自分の非に気付かない親たち

あるバツイチの女優さんがテレビで占い師に人生相談をしていた。

その女優さんは「私は再婚できるのでしょいか？」と質問していたのだが、俺はなんともいえないモヤモヤとした気持ちになった。

彼女のダンナは別居中に事件を起こした。

その後、ダンナとは別れたけれど、俺からしたら、そのダンナと付き合っている間に「こいつはヤバい奴かもしれない」という判断がなぜできなかったのかと、彼女に対して不思議な気持ちがしていた。

そして、彼女は世間から「男を見る目がない女」のレッテルを貼られてしまっていることに、本人は全く気付いていない。

彼女いわく、自分の家は、家族みんなで父親の帰りを待つて夜ご飯を食べていたという。なので自分も再婚したら、みんなと一緒にご飯を食べられるような家庭を築きたい、と。彼女が理想とする家庭像は、そういうものらしい。

子供は親の背中を見て生きている。だからこそ、父親は、一生懸命働く姿を子供に見せてあげることが、結局は子供のためになっているのだ。

しかし彼女は、違う。

子供のために早く仕事を切り上げて帰ってくる父親を「いい父親」だと思い込んでいる。

自分が別れたダンナがいい男かどうか見分けがつかなかったように、いい父親の見分けもつかない。彼女は、この先も幸せをつかむことは難しいかもしれないね。

理想像の思い込みは、自分を見失うといういい例かもしれない。

定義：理想の家庭像に縛られているうちは、幸せから遠ざかっている

■子供を子供扱いする親たち

子供のことを、ただ怒鳴りつけたり、叱り飛ばすだけの母親をよく見かける。

たまには感情的になって叩いてしまってもいいとは思うけど、毎日毎日怒鳴り散らすというだけじゃ、いいとは言えない。

ましてや「隣の人に怒られるからやめなさい」なんて言い方は論外。叱っている理由が他人の目、という観点が間違っている。そうではなくて、何がいけなかったのか、理由をきちんと子供に分からせてあげることが大事なんじゃないか。今の日本は、親自身がどうすればいいのか分からなくなってしまうのが、現実なのかもしれないね。

叱り方って、大人の誠意が表れるものだよ。

子供を安易に子供扱いするんじゃないかと、1人の人間として、1対1で、正面から向かい合っているかどうかが重要なんじゃないかな。

だから俺は、たとえ1歳の子供でも、一人前の人間として扱うようにしている。対等にね。

俺の仕事仲間で、小学生の娘をもつ女性がいるんだけど、その娘と会うとき、俺は子供じゃなくて、立派なレディとして扱う。

だから母親からは反抗期だのワガママだのと言われている娘が、俺の前ではものすごく素直に話をしてくれる。彼女は母親に「鷹さんは、私のことを一番よく分かってくれる」と話しているらしい。

そして、子供は、大人が考えるより遥かに感受性や嗅覚が鋭く、知らない人に会った瞬間、この人は良い人かどうかを判断する能力がある。

本来、そういう嗅覚は誰もが持っていたはずのものなのに、大人になるにつれ、野性的な判断能力がどんどん鈍ってしまうんだろうね。

子供には余計な記憶が入っていないため、純粹に大人を見る目があるのだろう。そして、信頼できると思う大人の言うことは、スポンジのように何だって吸収してしまう。

本当に子供の幸せを願うのなら、大人はもっと子供と正面から向き合うべきだ。それが教育のすべての基本なのだと俺は思う。

定義：どんな子供でも、1人の人間として扱うこと

■「友達親子」の行く末

最近、「友達親子」が急増しているらしい。

「友達のように仲がいい親子」のことなんだけど、そんなの自慢する親子って、ちっともいいことじゃない。親子は友達じゃないんだし、ましてや、子供は親の所有物じゃない。

そして、子供は子供で、すぐ親の意見を求めてしまうし、親は親で子供を自分好みにコントロールしていかうとする。ある人から聞いた話だけが、友達親子を中学生まで続けてきてしまった娘は、学校で話し合いの際、意見を求められても何も答えられなかったという。数分後、ようやく口を開いたと思ったら、ポツリと「家に帰って、お母さんに聞いてみます」と言ったという。

こういう例をみても、友達親子は子供の自主性を失くすことがわかるだろう。

そして、親子なのに友達みたいなノリでいるから、結婚をして家を出て行った娘が、平気で実家に帰って来るんじゃないかな。親も喜んで、娘を受け入れちゃう。

そうやって、結婚した後も親が娘を甘やかしているから、簡単に離婚しちゃう人が多いのかもしれないね。だって、旦那さんや旦那さんの両親に頑張って尽くしているより、実家で甘やかされていたほうが、居心地いいに決まっているから。

本当に親が娘のことを思っているのなら、旦那さんとしっかりした家庭を築かせるために「実家には安易に戻ってくるな」と言うべきじゃないか。

昔は、「嫁に出たら、実家の敷居をまたぐな」と言って、嫁がせたものだ。結婚して、旦那の家の籍に入るってことは、娘は、嫁ぎ先の家の人間になるのだ、ということ。その厳しさを、親も覚悟して嫁に出したものだ。さらに言うなら、親は子供に余計な口出しをしないこと。

特に、思春期の男の子はエッチなことに興味を持つことが自然なんだから、放っておけばいいのに、どうやら息子に過干渉の母親も増えているらしい。

俺も、中学生のとき、夜中に親の目を盗んで、チャリンコでエッチな本を買いに行ったものだ。

当時、成人用の雑誌は「ビニ本」といって、中身が見えないようにビニールで包まれて、自動販売機で売られていたのだ。

俺の部屋に隠していたビニ本の存在を、おふくろは知っていたのかもしれないけれど、何か言われたことは1度もない。

初めて俺が夢精したのは、中学校3年生だったかな。汚したパンツは、洗濯してもらわねえわけにもいかないから、原っぱに捨てた。

「スライディングをして、パンツまで破けたから捨てていた」とか何とか、ウソをついてね。そのときもおふくろは、「ふーん、そう。」って感じだった。

おふくろは、あの厳しいばあちゃん娘だから、一筋縄じゃいかない。芯はすごく強い人だと思っている。

秋田の女性の特徴かもしれないが、「男は好き勝手をして当たり前」みたいな肝が座っているところもあった。

俺が何かを散らかしたりすると「だらしない」って、よく言われたけれど、何かを詮索されたり、干渉されたりしたことはなかったように思う。

こういう母親に育てられた俺だから、親が子供へ過剰な干渉をすることにとっても抵抗感をもってしまふ。親は子供を大きな心で見守りつつ、お互いが自然体でいることが、子供のためになると俺は思っている。

定義：昨今の離婚率の上昇は、友達親子が増えたから

■ 子供に干渉しすぎる親たち

今の親たちって、子供の生活に入りすぎているよね。

たとえば、学校から帰ってきて、「今日、どんなことがあった？」「誰と遊んだの？」「誰かに意地悪されたりしなかった？」とか、細かく聞き出そうとする親が多いらしい。

子供が、朝起きて、学校に行き、帰宅して夜ごはんを食べて寝る。それが子供の生活の8割を占めると思うけど、その間のどこに首を突っ込むことがあるのか不思議だ。

昔は、子供のケンカに親が出るな、という世の中だった。今でも俺はそれでいいと思う。

しかし今は、「娘のマナージャーは私です」と公言しちゃっている親も多い。

「誰かにこう言われたら、こう立ち回りなさい」とか「こう言われたら、こういい返しなさい」とか、行動を細かく指示したり、メールの文体まで母親が書いたり、必死だ。

そういう親がいるからこそ、子供は自分で考える能力を失っていくのではないかって俺は思うね。

子育てというのはもともと単純なものだと言いたい。

親が子供にしてあげられるのは、寝坊をしないで朝起きること。ご飯を作ってあげること。寝る場所を提供してあげること。

そのくらい単純なものだと考えていけば、イヤでも子供の自主性は育っていくのだ。母親はそうやって子供にとっての「安全基地」を作ってあげればそれでいいんじゃないかな。

外で頑張って、ときには傷ついたり、落ち込んでいても、母親が温かく見守ってくれていると思う場所があるから、子供はくじけずに頑張れる。

そういう心持ちで親がどんと構えていけば、子供絡みの問題はもともと減っていくと思っている。

定義：親は子供にとっての「安全基地」であればいい

■子供のために、コーチとSEXする母親

今も昔も、女子高の生徒と教師ができちゃうってパターンはよくあるらしい。たしかに、女子高の先生って、どんなにブ男であれ、若ければそれなりにモテる。

最近、子供の生活に首を突っ込む母親が多いが、その子供の習い事で、その先生やコーチと母親がデキちゃったって話もよくあるらしい。

今の子供たちって、2つも3つも、塾や習い事をしている子供が多数だけれど、そういう場所で、母親と先生、またはコーチが、デキちゃうってパターン、俺の時代ではなかった。

子供が習い事をしている間、母親も一緒に見学をしていることがあるが、見ているうちに、ついつい気持ちが揺らいてしまい……というパターンならまだ分かる。純粹に惹かれあつて、そうなってしまったなら、まあ仕方ないかもしれない。

でも、子供がスポーツなどのレギュラーを獲得のために、わざわざ先生やコーチとSEXする母親がいるというのだから、驚きだ。いわば、枕営業のようなものでしょ。

レギュラー獲得の背景に、自分の母親とコーチがSEXしていたなんて知ったら、子供はどう思うか、考えたことはないのかな。

「子供のため」と思い、母親が身体を売ることは、ひとつも子供のためになつてはいない。子供への過干渉は、もはやここまで来ているのか、と愕然としたね。

子供への愛情表現として「子供のためなら、命を捧げてもいい」と言うこともあるけれど、「子供のためにカラダを捧げてもいい」という母親はちよつとね（笑）。

これも結局、そこまでして子供に尽くしている健気な母親、という自分に酔っているだけ。自己犠牲の精神は、いつけん立派に思われるけど、それって結果的に子供のためになっているか？ ってことを行動する前に自分の胸に手を当

てて考えて欲しいと思う。

定義：子供への自己犠牲は、本当に子供のためになっているか考えよう

■子供のために仕事を休む親たち

俺の親父は、家庭内の余計なことには口出しをせず、家族を食わせていくために一生懸命働く。それに対して母親は、家族の細々した面倒をみる。そういう家族が、昔は当たり前だった。

そう、父親と母親の役割は明確だったのだ。

俺が子供の頃、何かを親にお願いするとき、母親が「いいよ」と言っても、父親が「ダメ」と言えば「ダメ」。たとえそれが腑に落ちないことであれ、父親がダメと言ったら絶対にダメ。それが普通だった。

しかし、最近の父親たちは、子育てに首を突っ込むのが当たり前前の時代。「イクメン」なんていう言葉が作られるほど、子育てに参加することが「いい父親」とされている。

会社を休んで、子供と一緒に綱引きをしたり、授業参観で工作したり。俺には信じられない話だ。それどころか、父親と母親の役割も逆の現象が起きている。

「お母さんが怒り役で、お父さんはフォロー役」今はそういう家庭が多い。

俺は「会社を休んでまで、子供の行事に参加する父親には、絶対になってはいけない」と思っている。なぜなら、そんな父親の背中を見て育った子供は「会社はすぐに休めるもの」だと錯覚してしまうからだ。

お父さんは仕事を頑張っている、お父さんは一生懸命家族のために働いてくれる、つまり「仕事って、大事なことなんだ」ってことを子供が学ぶためには、お父さんは簡単に会社を休んじやいけない。

だって、そういう親に育てられた子供は、社会人になったとき、すぐ仕事を辞める人間になってしまうから。

そもそも、父親って、そんなに子供に媚びを売るような存在でいいのか？

父親は、家族から少しだけ距離を置いて、しっかり働き、その背中を見せてあげる。そうやって、一生懸命働いていく姿を見せてあげるほうが、子供にとってもいいことだ。

俺がガキの頃は「運動会や授業参観に親父に来てほしい」なんて、一度も言ったことがない。

たった一度だけ、ちらっと授業参観に来てくれたことがあった。親父が来てくれたことにビックリして、ものすごく印象に残っている。

家族で出かけるのだって同じだと思う。

年中、父親が遊びに連れて行って欲しかったら、果たしてその中のどれだけのことを子供は覚えているのだろうか。

俺の親父は、一度だけ、海に連れて行ってくれたことがあった。親父が海に潜り、素手で魚を捕って見せてくれた。それくらいしか、遊びに連れていってもらった思い出がないから、ものすごくよく覚えている。

父親って、たまに存在感を示すぐらいでいいんじゃないかな。そういう父親のほうが、子供から尊敬されていたように感じる。

口うるさく小言をいう母親役が家庭内に2人もいる必要はない。これはバランスとしてもよろしくない。これでは子供は疲れはててしまうだろう。

「役割を分担する家族」であるべきだし、それが子供のためになるのではないかな。

定義：父親はたまに存在感を出すくらいがちょうどいい

Part 2 学校教育の行く末

■学校教育の崩壊

最近アメリカから帰国した俺の友達の話を知ると、日本とアメリカの学校には明確な違いがあるという。

アメリカは飛び級制度もあるくらい、「勉強するもしないも自分は自分、他人は他人」という考え方が根付いている。しかし現代の日本は「学校は勉強をするところ」だと思っている人が多いようだ。もちろん、それは間違いではない。その友達から言わせると、「日本は自由な国だ、と教えているわりに、まったく自由が感じられない。すごく変な感じがする」という。

たしかに、今の日本の教育は、人間性が崩壊していると、俺も思う。

校則も「アレをやったらダメ」とか「こういう場合はこうやらなきゃいけない」とか、すべてに関して、とにかく細かい。色々なことが細分化されすぎていて、生徒たちも先生もみんなが逆に生きづらい世の中になってしまっているのではないか。

そして、学校で学ぶことの大前提である「友達とコミュニケーションをとる」ということすらも忘れられてしまっているのではないだろうか。

俺たちが小学生の時って、勉強だけしたい奴も、スポーツだけしたい奴もいたけど、みんなが仲良く共存していた。しかし今って、勉強ができないと「ダメな子」のような扱いをされる。昔のように、足が速ければスター性があり、みんなから人気があったような時代ではなくなっている。

そして、親が学校へ文句をいうなんてこともなかったし、子供のケンカに親が首を突っ込むこともなかった。

今の親は「子供を守るのには、親だけ」という意識が強く、その矛先は学校であれ、部活のコーチであれ、習い事の先生であれ、友達の親であれ、言いたいことは言わせて頂くというスタンス。

そんなモンスターペアレンツが多いから、学校の先生を擁護する声も多いのも事実だよね。

先生のいうことを生徒がまったく聞かず、学級崩壊するパターンも増えている。若い先生も、ベテランの先生も関係なく、うつ病になり、学校を辞めてしまう。

そういう現実の背景があるからこそ、先生たちは細かいルールを作っておかないと対処できなくなっているのかもしれない。

でも、いくらルールを細分化しても、イレギュラーなことには起きる。それに対応できず、先生たちがギブアップしてしまうのだ。

俺は、そういう先生たちをなくすためには、「職務を与えられて全うするには、権利を与えてあげなくてはいけない」と思っている。

たとえば、相手がピストルを持っていたら撃つてもいいというのは、警察が職務を全うするための権利。それと同様に、生徒が殴ってきたら、自分を守るために殴り返してもいいという権利を先生たちに与えてあげる。

給食費を払わない親がいれば、「払わないと警察呼びますよ！」と言える権利を与えてあげれば、イヤでも払うようになるだろう。

日本は職務を全うする権利が一番曖昧になっているんじゃないかと俺は思う。

「ダメなものは絶対にダメ」といえる権利。それを持つことによって、今の学校教育が少しは変わっていくかもしれない。

定義：職務を全うするには、権利を与えてあげなくてはいけない

■ ゆとり教育の落とし穴

「ゆとり世代の部下とうまくやっていくには？」などという本が多数出版されているほど、ゆとり教育を受けた若者は、特徴的な人間が多い気がする。

俺のまわりにいるゆとり世代の人たちを見ていても、とにかくすぐ仕事を辞めてしまう。

この間、現場で出会ったADは、撮影で昼飯を食べる時間がなかったからといって「お昼ご飯を食べられないなんて、耐えられない。お腹がすいて死にそう」とグチグチ文句を言っていた。

俺からすると、撮影で一食抜いたくらい仕方のないことだと分かっているし、文句を言うなんてありえない。

結局、そのADは数か月後「自分の時間がないのが耐えられない」ということを理由に辞めていった。

はたまた、自分が好きなAV女優さんのマネージャー募集に意気揚々と応募してきた若者は、マネージャー業という仕事で、こんなに大変だったとは想像しなかったと文句を言っていた。

朝、早く起きて、女優さんの自宅まで迎えに行き、撮影が終わったら女優さんを家まで送るまでがマネージャーの仕事だ。

彼は、4時間しか睡眠時間が取れないとグチっていたようだが、俺からしたら、24時間中の20時間も大好きな女優さんと一緒にいられるのだからいいじゃん！　って思うけどね。その後、彼は3日でマネージャーを辞めたいらしい。

マネージャーのような仕事はたしかに、朝早くて夜遅いけれど、今の世の中はどんな仕事であれ、少なからず残業はあるだろう。

「自分の時間がほしい」ということを、会社を辞める正当な理由として掲げて辞めるのは、ゆとり世代ならではの特徴だ。

もちろん、ゆとり教育を受けたすべての人がこうとは限らないし、一生懸命頑張っている子もたくさんいることは確かだ。

しかし、ゆとり教育が今後どう変わろうとも、現時点でその恩恵を受けて育った世代は確実に存在しているという事実はどう向き合うべきかが今後の論点だと俺は思う。

ゆとり教育の弊害に気付いて、今ではすっかり教育界は「脱・ゆとり教育」。学校が土日休みが当たり前だった子供たちが、急に土曜日も学校に行け、と言われたら混乱するよね。

教科書も年々分厚くなって、先生の教える授業内容も増えてきている。日本の教育って一体、どこに向かおうとしているの？　と思わず問いただしたくなるよ。

これからの脱・ゆとり教育も、願わくは昔のような「詰め込み教育」のように極端にならないで欲しい。大事なのは、子供の個性や可能性を伸ばし、日本の未来を背負ってくれる大人に成長してもらうことだから。

定義：ゆとり教育の失敗を活かした上での「脱・ゆとり教育」を目指せ

■24 時間365日ついてまわる、現代のいじめ

いじめはいつの時代も絶対になくならないと思う。

俺たちが幼い頃も、少なからずいじめはあった。体育館の裏に呼び出され、殴られたり、砂をかけられたり。

しかし、殴られたら、顔に傷がつく。だから、〇〇くんは誰かに殴られたと誰もが把握できたので、いじめっ子たちは、すぐに先生に怒られていたものだ。

そういう単純ないじめ方だったからこそ、いじめの存在は認識しやすかったし、いじめを苦に自殺するという子供もいなかった。

現代のいじめはもっと陰湿化しているといえる。顔を殴ったら、殴ったことがバレるから、服で隠れるところを殴るとか。

先生や親が見ているところでは仲良くしていると見せかけて、携帯やネットで誹謗中傷するとか。だからこそ、いじめが存在するということが分かりづらい。そうやって、いじめられている子供たちは、いじめられていることを誰にも気づいてもらえず、さらに追い込まれてしまう。

ここ数年、いじめが原因で自殺する子供のニュースが絶えないのも、そういういたいじめの陰湿化が背景にあるせいだろう。子供を守るのは、親だけだ。だからこそ、本当の意味で子供が訴えていることを見逃してはいけないと思う。

そして、子供がいじめられていると知ったとき、どうしたらいいか。

親ができることはただひとつ。子供を愛していると伝え続けることだ。

自分を愛している人がある、自分は生きている価値があると分かったとき、子供は必ず自尊心を持つことができる。自尊心はいじめを打破する第一歩だと俺は信じている。

定義：子供に自尊心を持たせてあげれば、いじめから打破できる

■金八先生が求められる理由

子供の本音って、大人が本音で話したときに初めて見えてくるものだ。でも、子供に対して、本音で話す大人ってほとんどいないかもしれないよね。

どこかで「子供だから」という目線になってしまい、分かりやすい言い方にしなきゃとか、頭の中で勝手にトレーニングしちゃっている。

本音で子供にぶつかるといえば、金八先生をイメージする人も多いはず。

「あんな先生いないよ」と思いながらも、番組がずっと続いていたのは、結局、ああいう「暑苦しさ」に惹かれちゃうから。

ああいう、本音でぶつかってくる大人が世間からいなくなっちゃったから、熱血漢が求められているんだと思う。今って、子供も大人も冷めてしまっている。そんな時代だからこそ、ああいう熱いヒーローが求められているのかもしれない。

定義：みんなが冷めている時代だから、暑苦しいヒーローが求められる

■運動会のかけっこで、順位をつけない学校

俺は昔からものすごく負けず嫌いだ。そのことに気付いたのは、俺が小学校6年生の時だ。走るのが得意で、運動会のかけっこでは、いつも必ず1位だった。

「俺は走るのが一番早い」って確信していたのに、小学6年生の運動会で1度だけ2位になってしまったことがある。その事実が悔しくてたまらなかった。そして、そのときに「俺ってすげえ負けず嫌いなんだなあ」って思ったんだ。高校生のとき、同じ学年に陸上部の短距離走の選手がいて、そいつが俺と同じ「加藤」っていう苗字だった。体育の授業で100メートル走のタイムを計るとき、2人ずつで走ることになっていた。

当時、俺はバスケットボール部に所属していた。そいつより瞬間的にスタートが速いってことはあるにせよ、誰が見ても「陸上部の加藤」が勝って当たり前、という状況だ。

「やってみなければ分からない」

もしかすると、相手が転ぶかもしれないし、俺がラストスパートでぬかすことだってありえる。

どんなときだって可能性はゼロじゃない。

結局、最後はそいつに負けてしまうんだけど、俺はその短距離選手との奴と走る場を与えられたということで、得るものが大きかったと思っている。

彼じゃなくて違う奴だったら、俺も気を抜いて走っていたかもしれない。いつもそいつと走っていたからこそ、負けず嫌いな俺は、最終的に二秒台まで記録を伸ばすことができたのだ。

今でも、どんなことに対して、俺のスタンスは変わらない。

「人生、何が起こるか分からない」ということ。これは、高校生だった当時から変わっていない。

そんなわけで、「与えられる場」というものは、ものすごく大事だと感じている。そこでどれだけ場数を踏めるかが「どれだけ自分が学べるか」につながっていくから。

特に、子供のうちは、自分でそういう場を作ることができない。だから、大人が子供に「場」を作ってあげなくてはならないと俺は思う。それが大人の仕事であり、親の役目だ。

数年前から、学校の運動会で順位をつけないケースが増えていうようだけど、これはナンセンス。

俺からすると、大人たちが子供たちから大事な学びの場を奪っているようにしか見えない。

順位を付けることで、自分が走るのが苦手なんだとか、負けて悔しいとか、それぞれが色々な気持ちを味わうことができるのに。

そしてそこで、じゃあ、自分が活かされる場はどこなのか、と別の場所を探そうとするでしょ。そういうことって、生きていくうえですごく大事なことだと思う。

「ビリになった子供がかわいそう」だと思う考えが、子供にとって良い教育なのか、もう1度考え直す必要があるんじゃないかな。

定義：与えられた場で、どれだけ場数を踏めるか

Part 3 日本 の教育に喝を！

■日本の教育社会の現状

いつの時代も、親が子供のことで悩むということは変わらない。

100人いれば100通りの子育てのやり方があると思うし、それはどれも間違いだとは、言い切れない。

子育てについての悩みは人それぞれ、千差万別だと思うが、実際に子供をもつ親の話を聞いてみると、現代の親って「子供にうんと手をかける」か「手をまったくかけない」かの両極端だと思う。

子供の学力低下を学校のせいにする親。

毎日のように習い事をさせている親。

子供がいないと何もすることができない親。

そんな親もいれば、「虐待」が社会問題となっている現実もある。なぜ、そんな両極端な現象が起きているのだろうか。たとえば、昭和30年という時代。

その頃、生きていた人間たちは、もちろん貧富の差はあったが、現代ほど考え方の違いをもった人間はいなかったように思う。日本は自由だ。だからこそ、各個人が自由な考え方をもっている。もちろん、それはいいことだと思う。

しかし、自由だからこそ、変な考え方をもつ人も増えてきているのも現状だ。

子供の給食費を払わないという問題もそう。お金がなくて払えないわけではなく「子供が給食を嫌いだから」とか、そんな理由を正当化し、給食費を払わない親もいるわけだ。

その格差を埋めるには、どうしたらいいか？

家庭、学校、教育委員会、文科省……どれかひとつを変えるだけでは、格差は埋まらないと俺は思う。

人間性が壊れた親たちが、子供のために、何かを変えられることなどできるのか、俺には分からない。

けれど、ただひとつ言えるのは「教育」は人間社会のなかで一番むずかしい問題だということ。

「教育」には答えがない。誰も正解を教えてはくれない。でも、そこであきらめずに根気良く「教育」と向き合い、子供たちと関わり続けていくこと。

結局は、親も先生も、そして子供たちも「あきらめない姿勢」を忘れないことが、大事だと俺は思っている。

定義：教育に答えはない。だからこそ根気強く諦めず

■ 1人で「ご飯が食べられない」「トイレ飯」

今つて、1人で行動することができない人間が多い気がする。いつでも誰かと一緒じゃないと不安な人つて、大人でもたくさんいるよね。

たとえば、OLさんとかでも、1人でお店に入ったことがないという人も多い。1人で行動することは、恥ずかしいことだという考えをもっている。

それを象徴する「トイレ飯」という言葉。

学校や会社で、1人でお弁当を食べているところを見られたくないからつて、トイレでお弁当を食べる人のことをいう言葉だ。

1人で食べることが恥ずかしいと過剰に思う理由は、やはり、現代の若者のコミュニケーションの問題があるように思う。

今つて、携帯があるから、すぐに友達と「つながる」ことができる。

そんな状況のなか、1人も友達がいない、作れないというのはある意味、余計に異質だと思われるしまうのではないか。だからこそ、「あいつ、誰も友達がいない」と思われることを過剰に嫌がる。しかし、大人になってしまえば、大勢で食べるより、むしろ1人で静かに食事をしたいと思うことも多いし、1人で食べていることを恥ずかしいとは思わないだろう。

携帯やネットが氾濫するこのご時世、それに置いていかれたらもう蚊帳の外だと過剰反応する若者たち。便利すぎるものが、結果、自分たちの首を絞めることになっていることを、誰かが気付き、止めてあげなくてはならない。

定義：ネット社会が生んだ孤独が、ゆがんだ人間を作っている

■セックスのことは語りたがらない大人たち

性教育の話を見せてもらう。

性教育で一番大事なことは、「避妊すること」の重要さを教えることだ。

セックスというのは、摩擦で気持ちよくなるものじゃない。コンドームを着けていても気持ちいいセックスはできる。俺が言うんだから、間違いない。

よく誤解されるけど、アダルトビデオの撮影でも、コンドームはちゃんと着けている。

「着けると気持ちよくない」というのは、コンドームを着けることを習慣づけていない奴の言いぐさだ。

「今日、コンドーム持った？」というのは「今日、歯を磨いた？」というのと同じくらいのレベルだと思っている。大人たちは責任を持って、コンドームを着けるよう、もっと徹底して思春期のうちに教育すべき。

厚生労働省と文部科学省が長年敵対しているのは、俺から言わせたら、バカみたいな話だ。厚生労働省はもっと現実的な性教育をしたいと思っているのに、文部科学省からしてみたら、教育でそこまでやるのはどうか、というわけらしい。日本の性教育は、セックスのこととなるとなぜか「臭いものにはふたをしろ」みたいな風潮になる。

それはおかしいことだと思わないか。

一方で、避妊や中絶についての知識も、世界から見ると日本は遅れている。

「避妊は男性主体」という考え方が先進国の中でもっとも多いのが日本なのだが、そのくせ国内でのコンドームの売り上げは大きく落ちているのだ。

「望まない妊娠」についての考え方も、欧米では「女性が主体的に避妊をし、中絶は女性の権利として認められるべき」という一貫性があるものが多い。

しかし日本では、避妊は男性任せなのに「母体や経済的に害があるなら、中絶は認められる」という意見が多い。

中絶において、女性に主体性が認められる土壌はなく、「生命の大切さ」などにすり替えられ、男性の行為と責任に一貫性がないのだ。こういった女性の妊娠リスクが、ますますセックスを日常から遠ざけている一因であることは、間違いない。

もちろん、それぞれの国の文化や歴史的背景などを辿って、分析していかねばならないけれど、まずは日本のこういった現状を、世界と比較して、実態として正しく把握する必要がある。

定義：日本は、性教育をもっと見直す必要がある

■警察官だった親父の愛情ある叱り方

俺が5歳くらいのとき、こんなことがあったのを覚えている。

俺は幼稚園まで歩いて通っていたんだけど、ある日の帰り道、同じ幼稚園の身体の小さい子が、やんちゃなような男の子たちに囲まれていじめられているところに出くわしたんだ。

俺は反射的に「やめろよ」って言った。いじめっ子たちは、驚いた様子で、すぐに逃げていった。俺は5月生まれだから、幼稚園時代は、同じ年齢の子たちより少し身体が大きくて、兄貴格の雰囲気があったようだ。

ガキの社会って、体格で決まるようなまだ単純な世界でしょ。もし俺がチビで軟弱だったら、一緒にいじめられていたかもしれない。そういう俺も、小学校に入るといきなり成長が遅くなり、チビの部類になっちゃったんだけどね。

みんなより、少し身体が大きかった幼稚園児の俺が、いじめを見て、なんの迷いもなく、当たり前のように、いじめていた奴を追いかつた。

「いじめている子を見たら、助けなくちゃいけない」という教えをされていたわけじゃないけれど、反射的にそういう行動をとったんだ。もしかすると、人間は生まれながらにして、「弱いものを守ろうとする本能」を持っているのかもしれない。

俺は、無意識にその行動をとったわけだけど、その行動がきっかけで「弱い者は守る」という正義が生まれたような気がする。

それは、警察官だった親父の存在が大きかったんだと思う。親父は、俺が小学生のときに胃に病気を患い、摘出する大手術をして、それ以降は警察をやめ、司法書士に転職した。

親父はヘビースモーカーだったけど、手術を機に、タバコもやめた。

今から30年以上も前のことから、当時の医療事情を考えると、胃の全摘出手術をするのは、相当のリスクがあったらしい。

手術後、麻酔が切れずに親父の意識が2日間戻らず、おふくろは病院に泊まり込んで、つきつきりで看病した。その時俺も、寂しくて不安だったと思う。

ちようどその頃、小学校の先生に「最近の加藤くん、元気がないんです」とおふくろが小学校に呼び出されたいらしい。そんな大手術を乗り越えて、戻ってきた親父は、以前より家にいる時間が長くなった。もともと無口で余計なことは言わない人だったけれど、家の中の存在感は常に大きかった。

普段は何も言わない親父が、俺が何か悪さをすると、ひとこと「いい歳して、まだそんなことをやってんのか」と言った。

その言葉は、俺がいくつになっても変わらなかった。小学生のときも、中学生のときも、高校生のときも、決まって親父に怒られるときは、その言葉だった。だから俺は、何歳になっても「もう〇歳なんだから、ガキみたいなことをしてちや恥ずかしい」という思いが頭をよぎっていた。

今考えると、その言葉は、自分の行動に責任を持たせるのに、ちようどいい言葉だったのかもしれない。

これが逆に、「まだ中学生だから仕方ない」とか「まだ20歳だからね」などと言った言葉を親から使われ続けていたらどうなるか。

おそらく「まだ〇〇だから」という言葉は、無意識のうちに、いつまでも未熟な子供でいることを促してしまう。

自立した大人になれないことを認めていることになる。子供を甘えさせるのとは、違う意味だ。「いい歳して」という親父の言葉は、自分の行動に責任を持たせるべく、暗に、子供を1人の人間として扱ってくれる魔法の言葉だったのだ。

定義：「いい歳して」は自分の行動に責任を持たせる、魔法の言葉

■父親から学んだ、男としての生き方

俺が小学校3年生のとき、親父が、家の前を歩いていた見知らぬ男の元に走っていき、突然胸ぐらをつかんだことがあった。

「お前が覗きの犯人だな！」と言って。

ちょうど数日前、おふくろが風呂に入っていたとき、「誰かが覗いている！」と叫んだことがあった。その声を聞いて、親父はすぐに外に飛び出し、覗き魔を追いかけたが見失ってしまったらしい。

その頃、近所で覗き被害が増えていたようだから、犯人は同一犯だろうとは思っていたのだろう。

それがある日、居間で寝転んでいた親父が、外を歩く足音を聞いて、いきなり顔色を変えて立ち上がり、見知らぬ男を捕まえた。

親父は、逃げた時の足音だけの記憶で犯人が分かったんだ。

「親父、すげえ！」と、俺はびっくりした。なんでそんなことが分かったのか、警察官のカンにしても、すごい。

とにかくたまげたけれど、親父はおふくろの身を守ったんだって、思った。そして、同時に、人間は悪いことをしたら必ず制裁されると思った。

今の世の中には、悪いことをしてもバレなきやいいんだ、という考えが意外にはびこっているんじゃないか。

見つからなければ、繰り返しやっても許されるという、感覚だ。

そういう感覚が心の中にあるから、いじめは一向になくならないし、虐待は増え、老人が生活費を浮かせようと万引きをする。

あらゆる世代の人間たちが、あらゆる場所で、いろんな悪さが絶えない。俺にはそれが信じられない。どうすれば、そんな感覚が育ってしまうのか。「正義感」と、わざわざ言葉に出してしまうとおこがましいけれど、多分俺は、ガキの頃から警察官だった親父の背中を見てきて、それを教わったんだと思う。そして、どんなときでも男は強くあるべき

で、女を守らなくちゃいけないと。

自分より弱いものを守らず、いじめるようなことはみつともないことであり、自分より強いものに向かっていくのが男なんだってことを。

俺の中には、ずっと当たり前のものとして、「弱いものを守り、強いものに向かっていく」という感覚が根付いている。

高校時代は、不良をしていたいても、強い奴にケンカを売っていくことしかしなかった。まあ、昔の硬派の不良は、弱い者いじめなんて、みつともなくて誰もやらなかったけれど。

今でも、権力を振りかざして、弱者から搾取しているようなおエラいさんって、すごくイヤなんだよね。

定義：男は強くあるべきで、女を守らなければいけない

■ガマンができない子供たち

今の子供たちって、昔と比べて圧倒的に「ガマン」ができないと俺は思う。

たとえば、お腹がすいたら「夜ご飯までガマンしよう」とは思わないはずだし、欲しいものがあったら、おばあちゃんやおじいちゃんにお願いして、買ってもらったりすることが多いはずだ。

若者がガマンできないという状態は、仕事でも家庭でも学校でも同じ。

「寝る時間がないから」といつてすぐに仕事を辞める若者も、泣き止まない赤ちゃんを殴ってしまう母親も、結局はガマンすることができないからなのだ。

日本は「自由」ということの履き違いで、「ガマンする」という教育が、いつのまにか消えて行っただ。自由が溢れている時代だからこそ、「ガマンすること」くらいは、家庭内できちっと教えてあげなくてはいけない。

そう、ガマンは、親ができる最低限のしつけなのではないか。

たとえば、小学校に入学すれば、授業の5分間は誰でも席に座っていなきゃならないよね。それができないというのがあれば、それは確実に親の責任だと思う。

自分の子供が5分間じっとしてられない理由を「先生の授業がつまらないから、私の子供がじっと座っていられないんだ」とか「うちの子供は立っているのが好きなんです」などという親がいれば、それはもうガツンと言ってやっても罰は当たらない。

5分間のなかで、勉強しているか、ただぼっと座っているかはさておき、とにかくじっと座っていることができる子供に育てなければいけないと俺は思う。

定義：ガマンは最低限の親のしつけ

■靴を揃えられない、若者たち

俺は幼い頃、しょっちゅう、ばあちゃんに説教されて育ってきた。

説教って、子供にとっては気分のいいものではなかったけど、年齢を重ねるにつれ、俺の根っこの部分で、ばあちゃんへの教えが染みついていることを感じる。

たとえば、撮影の現場で若いスタッフたちが、靴を揃えなければならぬ場所で靴を揃えない。揃えないどころか、靴が増えてくると、平気でドカドカと靴の上に靴を脱ぎすてたりしている。

そんな光景は、俺の家では考えられなかった。

だから、ウザい奴だと思われてもいいから俺は言う。

「おいおい、靴くらい揃えようよ」と。

小学校の頃は、玄関にランドセルをボーンと投げて「ただいま！」って家に入ると、「靴を揃えてから上がりなさい！」って、ばあちゃんに怒鳴られた。

ご飯の食べ方についてもよく怒られたものだ。

「お味噌汁は、ご飯の右側に置きなさい」そんなことを今の若者は知っているだろうか？

ちなみに、箸についたご飯の食べかすを味噌汁でさっとすすいで、箸をきれいに保ちながら食べられるように、右手の近くに汁の入ったお椀を置くらしい。昔の人のいうことは理にかなっている。

うちは両親が働いていたので、俺は、おばあちゃん子だった。

ばあちゃん俺のおふくろの母親で、俺の家のすぐ近くに住んでいた。じいちゃんも尺八の師匠をしていたので、よくお弟子さんたちが出入りしていた。だからこそ、人一倍、行儀やしつけというものに厳しかったのかもしれない。挨拶がきちんとできなければ、やり直しさせられる。これが子供にとってみれば面倒くさい。

しかし、根気よく教えるほうも大変だっただろう。当時は面倒くさいとは思えなかったが、今思えば、感謝の気持ちしかない。

定義：子育ては、靴をきちんと揃えることを教えることから

■セックスレス夫婦が与える子供への影響

セックスレス夫婦になるきっかけとしてデータを見ると「出産後になんとなく」「面倒くさい」などの理由が多い。

この「なんとなく」が曲者だ。本当は何かしら理由があつたはずである。

そのひとつのきっかけが引き金となつて、「もういいや」「忙しいから」と諦めてしまい、夫婦間で歩み寄ろうとしなくなり、多くのセックスレス夫婦が生まれているんじゃないかと俺は思う。

他人から見たら、仲の良い夫婦に見えても、もし夫婦がセックスレスだしたら、特別な理由がない限り「いい家族」なわけではない。

家族というのは「夫婦」が大前提で、親が幸せかどうかがすべての基本だ。

そして、「夫婦や親はこうあるべき」という、世間的な「型」や「状態」を気にし過ぎている夫婦が多い。

今の日本には、マニュアル頼りのインスタントな大人が増えて、人間力が低下している気がしてならない。手軽なモノやイベントで気を紛らわすのではなく、夫婦が共に生きる楽しさと歓びを分かち合いながら、健全な夫婦生活を営むことが、何より大切だ。

それができれば、現代病ともいえる「孤独や不満を感じる」ことが減るんじゃないだろうか。

そうして、親が幸せな顔をしていれば、子供だって何かを特別に感じるものがなくても、安心して育つと思う。「いいセックスが日本を平和にする」俺はそう言い切ってしまったていいと思っている。

定義：いいセックスが日本を平和にする

加藤鷹のSEX教育学

発行日 2013年5月22日

著 者 加藤 鷹

編集協力 堤 澄江 加藤 道子 (HappyLeo)

発行者 赤井 仁

発 売 ゴマブックス株式会社

〒107-0052

東京都港区赤坂8-5-40

ペガサス青山710

(c) Taka Katou 2013